

宇宙飛行士でしたので、男女によるセックス体位の実験は不可能でした。もちろん、宇宙飛行士にはユーモアのセンスを持っています。宇宙飛行士はときどきふざけてセックスのことを書いたりすることもあるでしょうが、なんら根拠は見つかっていません。

2000年3月に出版されたフランス宇宙飛行士のピエール・コーラの「最後にミッション」という本の中に、“ドキュメント 12-571-3570”について書かれています。この中で10人の異なる男女の無重力におけるセックスの体位が詳細に描写されています。これは宇宙飛行士によってテストされたと推測しています。ほとんどの体位で男女ペアがセックス状態を保つためには、膨脹してふくらんだチューブのような物理的な体の“拘束装置”を必要としています。

この「最後のミッション」で述べているドキュメントに関して、NASAのメディアサービスディレクターのブライアン・ウェルチは次のように述べています。「私達はこのようなドキュメントの存在を無条件に否定します。ドキュメントの後の数字はNASAのドキュメント番号付システムには合致していません。つまりNASAのものではありません。しかし、1989年にインターネットで流れていた捏造版のいくつかの初期バージョンには関係しているようです。」

ピエール・コーラの情報源は、どうもインターネットに流れていた、“実験8 ポストフライト要約: NASA 発行 14-307-1792”というドキュメントだったようです。このドキュメントは、スペースシャトルで行われたとされる宇宙セックス実験に関する内容だったように思われます。笑い話として読むには大変面白く、公式のNASAドキュメントで使用する特殊用語も使っています。しかしこのドキュメントについてだれに聞いても、このドキュメントが冗談の目的で作られた架空の内容である、との意見でした。

スペースシャトルの宇宙飛行は始めから終わりまで細かく計画されています。全ての実験は厳しく検討されています。それでも宇宙飛行は他と比べれば一般的ではありませんので、宇宙実験に採用されるためには多く競争に勝ち抜かねばなりません。シャトルの限られた空間と搭載できる質量の限界から、搭載できる実験装置は多くの専門家の審査を通過しなければなりません。実験の意義の大きさも問われるのです。また審査にはシャトルに収納する場所、使用方法、使用時期なども厳しく計画されます。NASA初の女性宇宙飛行士であるリー・セドンは、かつてシャトルに性的な補助器具や実験装置を搭載すべきと述べています。「シャトルでの研究テーマを審査する多くの専門家はこの件ではもっと前向きになるとは到底考えられません。でも搭乗するクルーメンバーは承認するでしょうし、コマンダーでも宇宙飛行の一部として実験を認

めると思います。」

公式には、宇宙セックスの実験は行われていません。2000年にNASA広報官のエド・チャンピオンは、「いかなる性的実験を行う予定も計画ありません。」と述べています。しかし非公式ではどうなのでしょう。NASAは個人的には宇宙での性交渉には強く反対している立場ですが、宇宙飛行士の間でセックスを禁止する正式の政策や規則はありません。「私達は宇宙飛行士のプロ意識と良識ある判断に委ねています。」とチャンピオンは記者に述べています。また、「宇宙でのセックスについて特別に、あるいは正式に記録されたものは何ともありません。」と述べています。この言葉は、いくつかの宇宙セックスに関する重要な推測の余地があることを示唆しています。

NASAは性的関係についての正式な実験の存在を表明していませんが、思い出していただきたいのは、同時に宇宙飛行士の間でセックスを禁止する法律や規則が存在しないのです。ある宇宙関連団体は宇宙セックスはすでに行われていると考えています。2000年2月の記事で、ジェームス・オバーグは宇宙セックスについて次のように書いています。「宇宙飛行の専門家の中では、セックスのような個人的な活動は実際に行われていることを常識として信じられています。」

この本を書きながら多くの人々に会いましたが、彼らも宇宙でのセックスは実際に行われていると考えていると語っています。「宇宙に行ったことのある人全員が、可能であつたにもかかわらずなぜ試さなかったのか不思議なのです。宇宙セックスの実験は他の実験と同じくらい重要だと思います。」と語るのは、航空宇宙人間工学エンジニアのジュニパ・ジェイララ^[10]。「宇宙飛行士は宇宙飛行に出発する前に全作業時間の中に個人的時間も正確に計画を立てます。また、多くの男女混合でシャトルミッションや宇宙ステーションミッションも行われています。彼らは、極限な状況と大きな挑戦に挑むために何ヶ月もの厳しい訓練を行います。このことで、仲間意識が強まります。彼らがどのようにして訓練をやったのけるのかは知りませんが、なにかしら秘策があるだと思っています。」

宇宙飛行士は、男女一緒に宇宙へ打上げられている間に宇宙でのセックスの可能性について話し合っています。NASA宇宙飛行士のマイク・ミューラン^[11]が最近出版した本の「ライディング・ロケット」では、1978年の宇宙飛行士教室について詳しく述べています。「かつて誰かが無重力状態の再現についての雑誌記事のところをピンで

[10] Juniper Jairala : NASA 女性技術者、航空宇宙とヒューマンファクタ（人間工学のような分野）のエンジニア

[11] Mike Mullane : 元 NASA 宇宙飛行士。1945年生まれ。スペースシャトルで3度の宇宙飛行を体験

留めていました。その記事の著者は宇宙セックスのためには少なくとも3人が必要であると仮説を立てました。その理由として、ニュートンの法則に従って性行為の最中に発生する反動、あるいは反作用が働くからです。なんて気の利かない考えなのでしょう。神様は私達に腕と足を与えてくれているのです。あるクラスの人はこの記事の隣に参加者リストを鉾で留め、無重力ではなく冗談で1G模擬実験（つまり地上で行う実験）に参加するボランティアを募りました。するとある女性が”ガキの真似するな！”と落書きをしてゆきました。」

スペースシャトルに搭乗して恋愛やセックスのための僅かなプライバシーを確保することもカップルにとっては大変難しいことのようにです。プライバシー確保のためには少なくとも宇宙ステーションにドッキングしているとかクルー向けの予備の空間が準備されている必要が有るようです。シャトル単独ではクルー用の空間は合計で66立法メートルしかないのです。この空間を、座席と機器類で一杯のフライトデッキ（シャトル操縦室）、さまざまな物資や荷物保管場所等を含む4人用睡眠スペースのミッドデッキ、かろうじて二人分の空間を取ることが出来る小さなエアロック（宇宙空間への出入り口）等に分けられています。「ちょうど親しい友人7人とキャンプをしているような感じです。違いは外に出られないことだけです。居住区は近接しており、プライバシーなど有りません。」とジョンソン宇宙センターのNASA広報官バーバラ・シュワルツが記者に述べています。

しかしながら、もう少しプライバシーが与えられるミッションもあります。それはロシアのソユーズ宇宙カプセルやスペースシャトルが国際宇宙ステーションや過去のミール宇宙ステーションにドッキングする場合はもっときちんとしたプライバシーが確保できるような広い空間が準備されています。クルーはソユーズやシャトルでゆっくりと寝ることも出来ましたし、宇宙ステーションのモジュールの一つでゆっくりと寝ることも出来ました。

宇宙ハネムーン

宇宙での性行為についてNASAは正式な方針や規則を持っているわけではないですが、夫婦共に宇宙飛行士の場合二人一緒に宇宙に行くことを禁じない、という正式な方針が決まっています。ただし過去の一度だけ、この方針を適用しなかった例がありました。それは1992年のシャトル飛行STS-47（STSとはスペースシャトルの飛行を意味しており、後の数字はシャトルの飛行順を示しています。）でマーク・リー宇宙飛行士

とジェーン・デイス^[12] 宇宙飛行士が飛行したときです。これは NASA が予想していなかった規則違反でした。二人は恋に落ちて婚約し、訓練中に結婚をしてしまいました。結婚をした途端、ミッションプランナー（宇宙飛行の全体計画を立案する責任者）は、本来は別々に飛行するはずだったのを別々にせずに、計画を練り直して一緒に飛行させました。

スペースシャトル・エンデバーの STS-47 では米国と日本の生命科学分野の共同プロジェクトを実施しました。シャトルの貨物室（カーゴベイ）には「スペースラブ^[13]」と呼ばれる別の与圧モジュールが搭載されていて、クルーは実験や作業を行うスペースとなっていました。シャトル全体の全体の重心を中心に設定するために、与圧モジュールは貨物室の前方の端には設置できません。そのために、シャトルの与圧されたクルーモジュールとスペースラブモジュールの間は与圧されたトンネルでつながっていました。このトンネルを使って、スペースラブに実験装置を運び込んだりクルーの移動に使います。トンネルはエアロック（外部と内部の中間にある出入り口のようなところ）につながっていました。シャトル側のドアとスペースラブ側のドアは位置がずれているため、トンネルの片方の端のドアから反対の端のドアを見ることは出来ません。つまり理論的には二人の結婚した夫婦宇宙飛行士はスペースラブの中で私的目的で一緒に過ごすことが十分可能だったのです。ただし他の宇宙飛行士が別の場所にいたらの話ですが。



元 NASA 宇宙飛行のジェーン・デイス（左）とマーク・リー（右）

テキサス大学宇宙心理学者のシェリル・ビショップ^[14] 博士によると、「正式には NASA

[12] Jan Davis : 1953 年生まれの名女性宇宙飛行士。3 回のスペースシャトル宇宙飛行経験。現在は退官している。

[13] Space Lab : スペースシャトルに積み込まれる再利用可能な与圧宇宙実験室。地球軌道上の微小重力状態で実験を行なう。普通の服装で宇宙実験が可能

[14] Sheryl Bishop : 女性宇宙心理学者。テキサス大学医学部社会心理学准教授

には知らされていないけど、夫婦宇宙飛行士の噂は聞いたことがあります。つまり、当時のクルーは絶対に怪しく、監視カメラ撮影を一時止めて夫婦には二人だけの時間を与えたというのです。ミッションに近い人はみなさん沈黙です。でも噂は本当だと推測するほうが正しいと思いますよ。」

STS-47 クルーは、24 時間作業のために赤チームと青チームに分かれて交替で作業を行いました。マークとジェーンは別々のチームに割り振られたため、一緒に起きて作業をすることは不可能でした。おそらく、大部分の作業はスペースラブの中での実験作業でしたので、二人がプライベートな時間を過ごすことは難しかったはずです。そして、二人が一緒に飛行することが許可された際には、どんなロマンチックなことでも、ましてや宇宙での性交渉は決して行わないように NASA から私的に警告されていた可能性が高いです。全ての宇宙ミッションの目標は最大限の仕事の成果と最小限の問題発生です。もし夫婦がスペースラブの中で夫婦の行為に忙しくしていたなら、ミッドデッキ^[15]にいる他のクルーは、おそらく嫉妬や好奇心、そして困惑などの精神的混乱を引き起こしていたと考えられます。

宇宙冒険ドラマ「スタートレック^[16]」のドキュメンタリー作家のユージン・”ロッド”・



スペースシャトル STS-47 に搭載された宇宙実験室スペースラブ内部、前列左がジェーン、右側隣りが夫のマーク

[15] スペースシャトルの操縦席部分は、上からフライトデッキ、ミッドデッキ、ロワーデッキの三層に分かれる。ミッドデッキは、クルーの生活する区画で食事や睡眠をとる。トイレもある。ペイロードベイ（貨物搭載部分）に搭載された宇宙実験室やドッキングモジュール／エアロックへ行き来するための出入り口もある。

[16] Star Trek：SF テレビドラマシリーズ。1966 年の放映開始以来、5 つのテレビシリーズ、11 本の映画が製作されている。作者が理想とする未来像を描いている。携帯電話、iPad、CT スキャナ等の原型が登場

ローデンベリ^[17]によると、「実際にあったことだと保証するよ。常識以外の証拠はないけど」。そして宇宙観光協会会長のジョン・スペンサーも当然の表情で、「宇宙での性行為があったかどうかは知らないけど、あったと思っているよ。人間は人間以外のなものでもないですね。少なくとも夫婦で宇宙に行って何もしなかったとすると、本当の夫婦じゃなかったね」。

シェリル・ビショップ博士も著者と考えが同じで、次のように述べています。「宇宙飛行士夫婦がその状況を利用しなかったとする理由が一つだけ考えられます。宇宙でセックスをしないと決めた米国人のカップルは危険を犯したくなかったからです。NASA 本部はこの件については永久に葬るでしょう。」

公式には NASA は、この 8 日間のミッションで夫婦の営みがあったことを知っているかどうかのコメントは拒否しています。オーランド・センチネル紙^[18]の記者に聞かれたときには、NASA 広報官は、「職員のプライベートな生活には興味がありません。」と答えています。私が問い合わせてもいつも非常にどっちつかずの返事しかしません。確かに否定はしていません。もし他のクルーと宇宙でセックスに宇宙滞在時間の一部分を使ったとすると、それは私生活の一部なのでしょうか。宇宙飛行士が食べ物を選ぶことや音楽を選ぶことも私生活の一部なのでしょうか。政府の資金で行われる宇宙ミッションでは、私生活と仕事の間の線引きをどこにするのでしょうか。



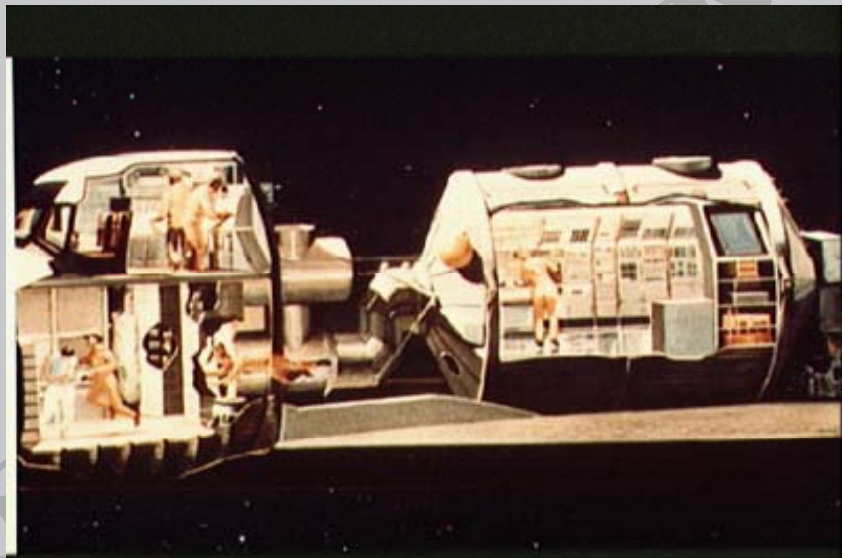
スペースラボ内の搭乗員。シャトル内部よりもゆったりしています。床には足を固定するストラップがあることに注目

[17] Eugene "Rod" Roddenberry: 1974 年生まれ。米テレビプロデューサー、父親は "スタートレック" の生みの親、ジェーン・ローデンベリ

[18] 米フロリダ州オーランドの地方紙

NASA の公式なスタンスとは、”二人の間になにが起ころうと、ミッションに影響を与えないのであれば、他の誰にもなんの関係も無く、二人自身の問題である”と考えることは理にかなっています。たいていの人は、個人的な恋愛やセックスの問題の詳細について他人に話したがるらないということに賛成のはずです。しかし一方で、非常に特殊で興味をそそる場所と状況での恋愛やセックスには高い関心が生まれます。でも悲しいかな、宇宙飛行士は自らのことを話そうとはしません。

元宇宙飛行士のジェーン・デイビスに「宇宙とセックス」についてのインタビューを行ったときに、彼女の返事は次のようでした。「どうしようもないわね。結構です」ということでした。私の最初の本「女性宇宙飛行士」のときには宇宙への情熱について私に多くのことをざっくばらんに語ってくれました。しかし宇宙とセックスについての話題となると一切コメントをしてくれませんでした。少なくとも彼女は返事をくれるぐらいの十分に礼儀の正しい女性でした。彼女の前の夫は元宇宙飛行士のマーク・リーですが、インタビューの求めにも応じてくれませんでした。ジェーン・デイビスは今でも NASA で働いており、マーク・リーは民間企業で仕事をしています。恐らく、元夫婦は、ジェーンがまだ NASA で働いているので、この話題について誰にも話さないという約束をしているのかも知れません。NASA ではすべての有人宇宙ミッションでは恋愛とかセックスの話題は避けている宇宙機関だからです。ジェーン・デイビスが NASA を退職したあかつきには噂について認めるのか否定するのか決めるでしょう。それまでは証拠を集め、仮説を立てることで我慢しましょう。



左側がシャトル内部の生活空間、右側がスペースラボ。曲がったトンネルが連絡通路です。

私の個人的意見では、もし宇宙飛行士の夫婦が宇宙でセックスをしなかったとすると、本当に愚かなことだと思います。少なくとも、宇宙では親密にしてロマンチックに抱き合いながら、窓から地球や星を眺めるべきだと思います。

シャトルミッションでは官僚的な正確さで飛行スケジュール、作業スケジュールを組みます。宇宙飛行士は語っています。眠ることも食べることも、そして作業を行うときもすべて正確に予定に従わなければなりません。自由時間をとることはほとんど不可能ですし、通常は睡眠時間を転宿するほどです。しかし宇宙飛行士には少しの自由時間が与えられます。この時間には電子メールを家族に送ったり、窓から宇宙や地球の眺めを楽しんだり、もちろん写真撮影も許されます。つまり、カップルの場合、親密なプライベートな時間を一緒に過ごすことも全く可能なのです。多くの宇宙飛行士は他の人との活動を省き、自分自身のために愛する人のために時間を単独で作ります。そして自分自身の個人的な宇宙実験を行っています。そうですね。ですから二人で一緒の自由時間を過ごすことが出来ない理由など無いのです。

国際宇宙ステーションの作業スケジュールはシャトルミッションよりも、かなりゆるやかなものとなっています。ミッション計画作成者はステーションでの長期間滞在ではもっと柔軟なスケジュールであるべきことを十分理解しています。なぜなら作業はステーションの維持管理作業や修理作業といった突発的な作業が沢山あるからです。シャトルよりもより沢山の空間によってプライバシーは増え、また換気扇や様々な装置によって騒音も増えています。より柔軟な作業スケジュール、より沢山のプライバシー、そしてより長期間の宇宙滞在が組み合わさって、宇宙ステーションは二人の性的接触には大いに適した環境を提供すると考えています。

元NASA航空宇宙医師のパトリシア・サニティ博士^[19]は2000年にマキシムとのインタビューで次のように語っています。「宇宙で何も起きていないのであれば、宇宙飛行士は私が期待するより遙かに想像力が劣っているとしか言いようがありません。」楽しみながら語りつつも、素晴らしいポイントを突いています。

ISS（国際宇宙ステーション）が1985年に開発されているとき、NASA心理学者のエバン・クリアウオータ博士はサイコロジ・トデイ紙に次のような記事を書きました。「明らかなことは、正常で健康な専門家グループならば、恐らく正常で健全な性的欲求は持っていると思います。」クリアウオータは初期のNASA宇宙ステーション設計チームの一員としてエームズ研究所で個々の睡眠室の防音に関する研究を行っていました。有り得る話として、防音とはステーションの一般的なノイズ（雑音）を遮断するために検討されると考えますが、しかし私は、防音とは一人で莉ラックするために必要な、

[19] Dr. Patricia Santy : NASA ジョンソン宇宙センターに勤務する精神科医で航空宇宙医師

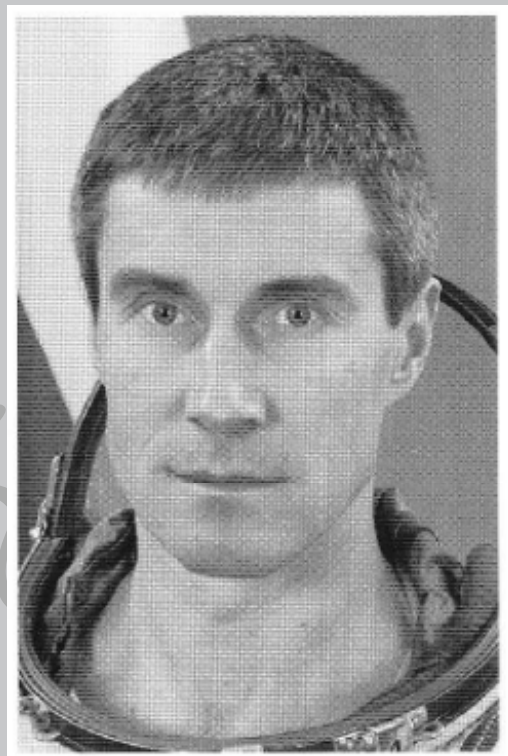
より個人的な環境を作りますが、同時に、友人や愛する人、そしてセックスパートナーにもより良い環境を提供します。現在のISSの居住区域は基本的には壁につながれた寝袋が備わったクローゼットであり、それにカーテンが付いているといった感じです。これではプライバシーは本当に限られています。

未婚のカップルや友人関係でも宇宙でセックスを試すかも知れません。より多くの女性がISSでより長期間滞在することを望めば、男女の宇宙セックスの可能性はもっと増えてきます。もちろん、同時に同性愛の関係も増加してくるでしょう。

セックス関係以外の出会い

私達は男女の親密な関係について述べてきました。しかし同性愛関係の可能性もあるのです。ゲイの宇宙セックスは可能性が高く、とくに宇宙ステーションでは特に高いと思われます。

宇宙活動家のデレック・シャノン、同性愛も通常のセックスも宇宙で起こっている理由を語ってくれました。「宇宙セックスを目撃したのは、3D映画のIMAXの宇宙ステーションで登場したコスモノーツのセルゲイ・クリカレフです。彼は他の誰よりも宇宙に長期間滞在しました。男女を問わず、出入りも無い状態で数週間以上も密閉された空き缶の中のような空間で彼と一緒に過ごしていた人達を想像することは出来ません。男性はホットな状態です。それでは、セルゲイが彼の婦人であるイレナとの間の提案を全て受け入れていたかどうかには拘わらず、お互いの理解に問題がないことを望んでいます。



イクメンのロシア宇宙飛行士セルゲイ・クリカレフ

しかしながら、なぜ同性愛の関係がまだ起きていないか理由があります。大多数の宇宙飛行士は軍人から選ばれており、パイロットとミッションコマンドは全員が軍人パイロットです。このことはロシアでも米国でも同

じです。両国でも不幸にも軍事部門では同性愛者（ゲイ）を受け入れていません。つまり軍事部門でゲイは存在しないと言っているのではなく、恐らく、国民全員に対するゲイの割合よりも軍隊での同性愛者の割合は少ないと思います。付け加えるなら、軍隊のゲイは性的嗜好を隠す必要があるという事実もあります。これらのことから、平均的に信じられている割合よりもより多くの同性愛恐怖症の人数が大きくなるのです。軍人が宇宙飛行士やコスモノーツになるときは、宇宙飛行士としての仕事をしているときも軍人であるわけです。だから、もし彼らが同性愛者の場合でも打ち明けることが許されず、他の宇宙飛行士やコスモノーツとでもオープンに議論することさえも許されないのです。

女性宇宙飛行士はまだ少ないので、ミッションにおいてレズビアンに関係になる機会はごく限られています。これまで2人や三人の女性宇宙飛行士と一緒に飛行したケースはありますが、国際宇宙ステーション、ミール宇宙ステーション、さらに初期の宇宙ステーションプログラムでも複数の女性宇宙飛行士の長期間滞在は未体験です。

元宇宙飛行士のマイク・ミューランが書いた本「ライディング・ロケット：Riding Rocket」は特に興味深い内容です。1978年の宇宙飛行士教育クラスで議論した時に、彼はグループの多様性について書いています。つまり、軍人と民間人の混成グループの場合、そして初めて女性が混ざった場合などについて書いています。「知られている真実から推測すると、宇宙飛行士の中には恐らく同性愛者が居たと思います。」果たして、ミューラの推測なのでしょうか。あるいは何かを知っていて隠しているのでしょうか。あるいは、同僚や友人に対する配慮から、事実を明らかにしないという決心をしているのでしょうか。

宇宙における同性愛者のセックスは、宇宙での異性愛のセックスよりも可能性がかなり低いと思われます。公的資金で運用されているNASAとしては、いかなる行動に対して社会から抗議を受けることを希望していないし宇宙飛行士になる人材の選択でも非難されることに神経を使っています。もちろん、宇宙で仕事をするために正しい人材を選ぶ際に性的嗜好を評価に含めることはおかしいことだと思います。というのも、同性愛恐怖症の人口は米国では多くの割合を占めているからです。そのため、同性愛者の宇宙飛行士は社会に対してもNASAに対してだけではなく、NASAの選考委員、NASA長官、同僚、仲間のミッションクルーメンバーからも隠れている必要が有るのです。

同性愛宇宙飛行士への社会の認識は少なくとも過去の例ではキャリアの終焉であり、

今でも同じだと思います。同じ理由で、宇宙で仕事に他のクルーの近くで同性愛パートナーとの性行為はほとんど不可能であり、他のクルーメンバーが絶対に信頼出来ない限り、確実に宇宙飛行士としてのキャリアは終わりでしょう。おそらく近い将来にはこの状態は変わることはないと思います。

一般の社会の同性愛者数より宇宙飛行士の同性愛者が割合的に少ないと考えると、宇宙飛行中に同性愛者を見つけることは、はなはだ困難といえます。同性愛宇宙飛行士を見つけることと、男女の宇宙飛行士が互いに性的に惹き付けられることとは意味が違います。しかし、長期宇宙飛行の場合、同性愛者でも非同性愛者でも地上のように性的な話題を話すことは無いでしょう。この話題については第4章の「宇宙で渴望するセックス」で取り上げます。参考として、全ての宇宙飛行士が最高のコンディションを維持するための選択プロセスと基礎的な訓練を述べます。望ましくは、近い将来のいつか、男女ともに同性愛宇宙飛行士が世界に向けて告白し、性の問題と仕事の成果とはなんら関係のないことをすべての人々に証明する日が来るでしょう。ただ、その宇宙飛行士が引退した後か、あるいは宇宙飛行の仕事が完全に終了するまでは、このようなことは起こらないでしょう。

男性二人の宇宙ステーションでの生活では、同性愛はたびたび起きている可能性は非常に高いですが、噂や証拠などは聞いたことがありません。6か月以上の宇宙ミッションでは、通常アメリカ人とロシア人の混合となっています。この状態で同性愛状態になったとすると、隠すことに必死になるでしょう。なぜなら、公表されてしまうと経歴に傷がつくし結婚に支障をきたすかもしれません。これは大きなリスクですし、おそらく話題にすらならないでしょう。一方で、宇宙飛行士という仕事は実に危険な仕事なのです。この危険という言葉の中には性的な衝動もあるでしょうし、同性愛になる危険性、二人以上によるセックスの危険性、無重力での乱交の危険性なども含まれます。

単独飛行

自慰（マスターベーション）についてはどうでしょうか。相手とのセックスとは異なり、男女ともに宇宙飛行中にほぼ確実に自慰を行っています。数か月以上の長期宇宙飛行を経験した宇宙飛行士は男女ともに沢山います。かりに宇宙飛行中に自慰をしないと決めていても大部分は行っています。数日間の短期宇宙飛行でさえも自由時間には自慰にふけることもあるようです。これは個人的な問題として NASA は認識してお

り、この件に関する特別の研究はまったく考えていません。しかし、興味深い研究結果として、無重力に長期間滞在すると下半身の筋肉量が少なくなり、結果として性欲が減退するだろうと考えられています。

バレリ・ポリヤコフ宇宙飛行士によると、長期宇宙滞在の終わりに心理的な支援サービス部門の人たちが色彩豊かな映画を何本が送ってくれました。この映画のおかげで意欲も精力も湧いてきたし、通常の成人男性のようにふるまうことが出来るようになりました。このことに何も恥ずかしがることはありません。私はこの話は、普通の健康な成人男子のようにポルノ映画を見ながら自慰にふけることができたことを意味すると考えています。少なくともポリヤコフ宇宙飛行士はそうだったと思います。

元 NASA 宇宙飛行士で人類初の月着陸を成し遂げたときの三人の宇宙飛行士のうちの一人でもあるマイケル・コリンズは、彼の著書「リフトオフ」の中で次のように述べています。スカイラブ宇宙ステーション（1970年代に実施された米国初の有人宇



軌道上のスカイラブ

宙ステーションプログラム）打ち上げに先駆けて、ある医師グループが宇宙飛行士に対し警告をしていました。その内容とは、完全に独身の男性の場合、前立腺と尿道が感染される可能性があるというものでした。その予防策として一人の医師は、定期的に自慰を行うようにアドバイスをしていました。ただし、スカイラブ宇宙飛行士の一人、ジョー・カーウィンはこのことを否定しています。著書の中ではこの話題に関する部分でジョー・カーウィンについて述べていますが、コリンズも含め多くの宇宙飛行士はこのアドバイスに従い、自ら快楽を味わっていました。

ただ、この後に書かれている内容では、スカイラブでのアルコール飲料の不足について述べており、コリンズによると「スカイラブではセックスはありませんでした。作業の大変さや、その他たくさんすることに意識を集中する必要性があり、異性のことに関心を持つ暇もありませんでした。」

宇宙飛行士のアラ・ビーン（アポロ 12 号の宇宙飛行士でもあり、4 人目月面着陸宇宙飛行士）はこのことについて、海軍の軍艦に例えている。「異性のことを考えるなんて意味ないよ」と述べています。この言葉から受ける印象としては、明らかに同僚との性的関係に対する述べています。なぜなら、これにつづく文章では男女混合の南極探検隊について述べています。つまり、容易ではあるが結論を述べるとすれば地上での自慰は個人的な意思決定で行うものであり、自慰にふける者もいれば控える者もいる、ということです。これは宇宙でも同じことです。

野性的に

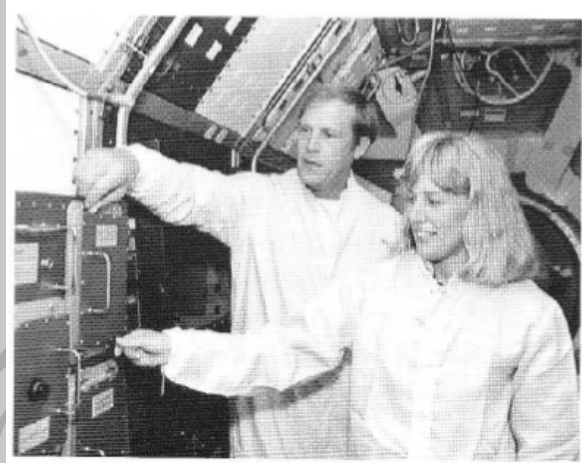
私たちは、地球軌道は完全に独身生活者のものではないことを学んでいます。宇宙セックスによる影響に関する報告書も作成され映像も残されています。もちろん人間ではなく動物を使ったものですが。

NASA の生物学者らはスカイラブに数匹の魚を送り込みました。そして産卵と孵化を観察しようと試みました。魚は無重力環境では半狂乱状態に陥り、ぐるぐる回転していました。そして無重力環境に順応することはありませんでした。不幸にもこの魚が繁殖することはありませんでした。

1979 年、旧ソ連は宇宙でのセックスを初めて実験を行おうとしていました。その内容とは、五匹のメスと二匹のオスのネズミを宇宙に打ち上げ、交尾をさせるというものでした。19 日間の宇宙飛行の末、地上に帰還しました。しかしながら、宇宙で交尾を行った証拠も見つからず、また、子供が生まれることもありませんでした。恐らく宇宙の無重力環境では精神的に落ち着かなかったのでしょう。

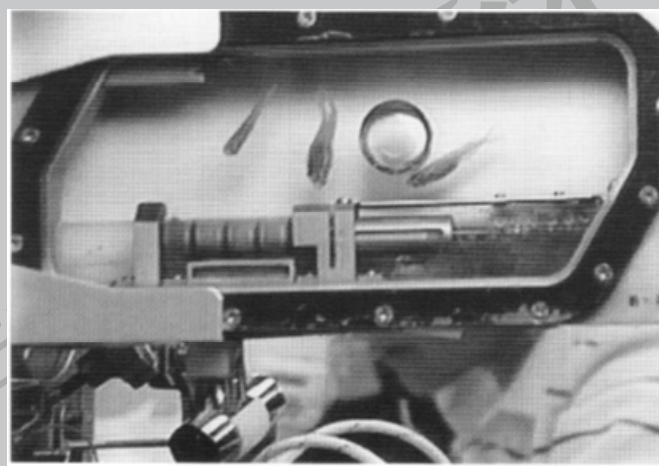
1985 年 11 月、スペースシャトル・チャレンジャーが打ち上げられ、240 匹のメスと 90 匹のオスのミバエ（fruit flies：日本では一般的にショウジョウバエとして知られている）が持ち込まれました。これらのハエは宇宙で繁殖し、産卵と孵化に成功しました。多くの卵は幼虫になれませんでした、世界初の宇宙でのすべての増殖プロセス実験に成功しました。

1992 年のスペースシャトル STS-47 エンデバー打上げでは、夫婦のマーク・リー宇宙飛行士とジャン・デービス宇宙飛行士が搭乗し、生命科学実験として南アフリカ産のメスガエル（正式な名称はアフリカツメガエル）4 匹が一緒に乗り込みました。宇宙ではこれらのカエルにホルモンを注射し排卵を誘発させました。これらの卵にカエルの精子を与え、オタマジャクシに孵化させる実験を行いました。なんと、実験に成功したので、この実験は、人工授精ではありませんが、昆虫以外の生物を使って宇宙で繁殖させた世界初の実験でした。



スペースシャトルの実験装置をチェックしている
ジェーン・デイビスとマーク・リー宇宙飛行士

米国とロシアの宇宙プログラムでは、ネズミのような脊椎動物を宇宙実験として多く使われました。これらの小動物は無重力環境に遭遇すると怯えてしまい、収納装置の壁にへばりついたり、正常な姿勢と保とうとするために、何かの表面に必死にしがみつこうとしました。しかし、少なくとも一例だけは「つがい」のネズミの交尾に成功しました。これはロシアのコスモス 1129 と呼ばれるカプセル型宇宙実験衛星に実験装置を搭載して行われ、地上に帰還して装置は回収されました。ネズミは妊娠はしませんでした。帰還後の実験室で行った試験では排卵と受精が確認されましたが、理由は不明ですが胎児まで成長することはありませんでした。



宇宙のメダカ交配

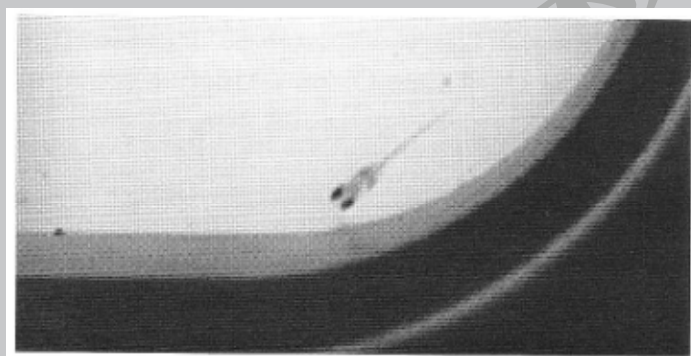
この実験の結果、脊椎動物は無重力環境に順応し、繁殖の可能性も示すことができ

たのです。航空機を使った無重力実験に多くの大型動物が使われていますが、伝えられるところによれば、動物はとにかく大きく、実験内容も最初の米国有人宇宙飛行士の実験の時のようになり激しい内容のようです。

最終的には、日本の東京大学の井尻憲一博士^[20] が率いる実験チームは、航空機の放物線飛行による短期間の無重力環境実験を利用して、無重力でも、ぐるぐる回転運動をしないで落ち着いている魚、つまり無重力に強い魚を見つけたのです。この魚は色鮮やかな美しい熱帯魚ではない淡水魚のメダカなのです。メダカの中には、無重力でも水の中をすいすいと泳げる遺伝子を持っている種が存在していたのです。メダカは光によって方向感覚をつかむと考えられていたので、実験では水槽に向けて太陽の光に似せた光線を照射しました。なんて詩的な魚なのでしょう。



メダカの赤ちゃんとお親メダ



赤ちゃんメダカ 長さ5ミリメー

NASA は 1994 年に二組のつがいのメダカをスペースシャトルコロンビアに搭載しました。ワシントンポストの記事に、井尻氏のコメントが掲載されていました。それによ

[20] 東京大学 アイソトープ総合センター 教授

ると、「二組のメダカカップルは経験豊かな恋人同士ですが、宇宙での最初の試みは失敗しました。さらにお互いに嫉妬深い(?) ような突っつき合い攻撃をしました。特にメスは交配の間、ときどき相手カップルを攻撃しました。」

実験開始から3日後、メダカは交配しました。この様子のライブビデオが地上に送信され、研究者らはこの感動的な場面を自分自身の目で確認できたことに感動していました。この実験は脊椎動物が宇宙空間で交配を確認した初めての実験となりました。このビデオは、元 NASA 主任研究者のキャシー・オルソン博士が彼女の講義では、冗談で「ポルノ映画」として紹介していました。

この実験により、生物学的プロセス、つまり産卵、交配、孵化というプロセスが宇宙でも機能したことを意味しました。二組のメダカの夫婦は8匹の赤ちゃんメダカを宇宙で授かりました。そして夫婦は祖父母となり、さらに地球に帰還してから子供たちが赤ちゃんを授かり、最初のメダカ夫婦は曾祖父母になりました。

無重力とセックス実験

そうです、地球上で無重力でのセックスが行われているのです。地上で無重力環境を体験する方法は二通りです。まず、地上で無重力を体験する方法を説明し、それに続いて、無重力でのセックスについてお話しすることにしましょう。

無重量状態は落下することで体験できます。体を下から押し上げるもの、たとえば地面とか空気摩擦とかが何もないときに、無重力状態になります。無重力状態をゼロ-Gとも呼びます。Gは重力のことで、これがゼロということです。スカイダイビングでは落下しているので無重力状態です。しかしながら、体に空気抵抗も働くので、落下速度は低くなり、人間の体は即座に最終速度（それ以上速くならない速度）に到達してしまいます。このような落下の状態でもほぼ無重力状態になりますが、完全な無重力とは違う感じになります。情熱的な目的のためにはもっと本物に近い無重力状態が必要です。

放物線飛行する航空機はより正確な疑似無重力状態を作り出します。航空機が自由落下状態を続けている間は、短時間ではありますが、ほぼ無重力に近い状態を航空機の中で体験できます。航空機を故意に自由落下させるというアイデアは、ちょっと考えると恐ろしいことのように聞こえますが、非常に科学的であり、芸術的でもあるの

です。放物線飛行とは、大砲の弾や投げた石が飛行する飛翔経路と似ています。航空機が急角度で上昇を続け、ある高度に到達したところでエンジンを停止します。すると航空機はそのまま上昇しながら飛行は続けますが、加速はゼロですので、徐々に速度は落ちてゆきます。そして上昇から下降に切り替わる点、つまり放物線飛行の頂点に達した後は、徐々に下降してゆきます。エンジンを停止した後の航空機の内部では、ちょうど無重力状態のように浮いている状態を体験します。でも実際は機内の人間も航空機と同様に放物線飛行をしているのです。エンジン停止後の状態を自由落下 (Free Fall) 状態と呼びます。

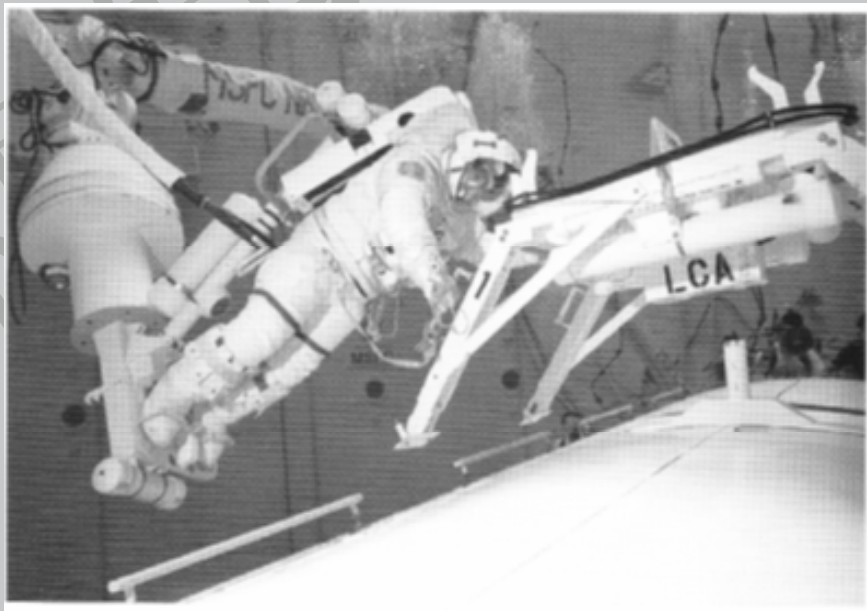


航空機の放物線飛行による無重力体験の場面と飛行経路

ある程度降下を続けると再びエンジンをスタートさせ、上昇を始めます。この時の航空機内の重力は1 G以上となります。この状態をハイパー重力と呼んでいます。そして再び予定の高度に到達するとエンジンを止め、自由落下状態になり、無重力状態を作り出します。このプロセスを何度も繰り返して無重力実験を行います。一回の放物線飛行で、おおよそ20～30秒間程度の無重力環境が生まれます。

放物線飛行の利点は、航空機の中で無重力を体験できることです。スカイダイビングの時のような風圧に耐える必要がないことです。しかも特別な衣服やパラシュートをつける必要もありません。裸でいることもできるのです。唯一問題があるとすれば、無重力を体験するためには、多少多めの重力を体験することぐらいです。

無重力環境を体験できる時間は、航空機の上昇速度と上昇角度によって変化します。もちろん航空機の飛行能力や馬力にもよりますが。一般的には 20 秒間程度の無重力を体験できます。それほど長くはないと思われませんが、地球の大気の中で作り出せる無重力環境ではベストと言えるでしょう。NASA や米空軍は無重力実験や宇宙飛行士の訓練にはこの方法を利用しています。映画監督のロン・ハワードと俳優のトム・ハンクスは 1995 年の映画「アポロ 13」^[21] で、無重力部分を撮影するためにこの方法を使いました。民間企業の「ゼローG社」は、一般向けに有料で放物線飛行のサービスを販売しています。お金を払えばだれでも無重力を体験することができます。さらに、月や火星の重力を体験することも可能です。もちろん、ご希望であれば無重力セックスも可能です。



NASA の大型中性浮力用タンクで宇宙船外活動の訓練を行います。水の浮力によって疑似無重力を体験できます。

スペインが製作したポルノビデオ「天王星実験 その2：The Uranus Experiment 2」では、一部のセックスシーンが無重力の中で撮影されました。一部のシーンでは、数人の男女の無重力セックスのシーンが描かれていますが、確かに無重力で撮影されています。カメラアングルが何回転もしているので、ビデオの視聴者には、この撮影が無重力で行われたと信じさせるには少し不十分な感じもしますが、最後の場面では、明らかに無重力で撮影されたことが明確になります。残念ながら、この後に書かれている内容のような無重力での体位についてはこのビデオ撮影では実験が行われていませんでした。もっとなにか特別に興味をそそる体位を実験する絶好のチャンスでした

[21] アポロ 13 号爆発事故の実話に基づくハリウッド映画

が、監督がそれを生かせなかったことを残念に思います。なお、この撮影にはロシアの航空機が使われたとされています。

航空機以外の無重力を疑似的に体験する手段として、水の浮力を利用するスキューバダイビング方法も開発されています。中性浮力（neutral buoyance）は、潜水器具も含めた全体重と浮力が完全に一致しているときの状態を指します。米国の宇宙飛行士は宇宙遊泳の訓練のために、ジョンソン宇宙センターとマーシャル宇宙飛行センターの大型中性浮力用プールを利用します。中性浮力の利点としては長時間の無重力模擬実験が可能ということでしょう。欠点としては中性浮力状態を得るために、重たくて大きな宇宙服を着用する必要があることです。

NASA コンサルタントで作家のハリー・スタイン^[22]が書いた「Living in Space：宇宙で暮らす（築地書館）」では、宇宙飛行士訓練用にマーシャル宇宙飛行センターで建設された中性浮力用水タンクを使って、重力のない環境で性的な「ドッキング」の実験が行われた、と書かれています。スタインによると、無重力環境での性行為は可能だが簡単ではない、とのこと。彼によると、無重力では、第三者の誰かが性行為を行う二人の体が移動しないように保持することで、より簡単に行うことができると述べています。

さらにスタインは、「だれかがタイミングを合わせて後ろから押してあげると、うまく性行為ができた」と述べています。「三人の被験者が実験をうまく成功させたときに、興味あることを発見したのです。それはこの実験で行った3人による性行為は、ちょうどイルカの交尾に似ているといものでした。イルカが交尾をするときは、第三のイルカが交尾のタイミングに合わせて交尾するイルカの後ろから押すのです。」ただ、イルカは時には第三のイルカがサポートしますが、しない時もあります。1997年に製作されたすばらしいテレビドキュメンタリーフィルム「イルカとロビン・ウィリアムズ：In the Wild - Dolphins with Robin Williams」（ロビン・ウィリアムズは映画俳優）では、イルカの交尾の様子を紹介しています。このフィルムでは「第三のイルカ」がサポートしているところは撮影されていません。交尾は、一瞬のうちに「ちょっと失礼」「はい終わり」「どうもありがとう」という感じで終わっています。視聴者がまばたきでもしようものなら、交尾の場面を見過ごしてしまいそうです。

たとえ、「三頭のイルカ方式」が人間に応用され、実験が行われたとしても、私は少し疑問に思っています。これはNASAが正式に行った実験ではないでしょう。このよう

[22] G. Harry Stine：1928年～1997年。模型ロケットをはじめて開発し、全米ロケット協会を創設した。宇宙分野のSF作家としても活躍。スタートレックのエピソードも手掛ける。

なセックスの体位に関する実験は、特別なボランティアと施設の職員の個人的な実験として中性浮力用タンクを使って非公式に行われたはずです。

全てではありませんが、多くの人にとってセックスの間、二人の体の位置を一定に保つために第三者がサポートする方法には、きわめて違和感を覚えると思います。体の位置を保持するのであれば、むしろある種の運動器具のようなものを使うほうが、より現実的だと思います。次の章では、この話題についてより詳細に述べたいと思います。そして宇宙でのセックスで、なんらかの器具を使う方法についてより明確にイメージできるようにまとめてみました。